

避難訓練やマニュアルに頼らない 「ただいま」から防災教育を始めよう

「小さな命の意味を考える」代表 佐藤 敏郎

東日本大震災からもう十年。いずれ南海トラフ地震が起きるとも言われている。台風や河川氾濫、コロナ禍まで我が国は「災い」に見舞われてばかりだ。災いから命を守るため、子供たちに本当に教えるべきことは？ 大川小学校で語り部を続ける元教師・佐藤敏郎さんに訊いた。

教員の後悔に向き合いたい

被災時の状況を教えてください。
大川小学校から約20キロ離れた女川第一中学校で卒業式の準備をしていました。避難訓練では「担任の先生と逃げなさい」と校内放送で指示していたけれど、停電で放送は使えなかった。担任と一緒にではなかったし、避難経路はガラスが落下し通れませんでした。少し考えれば「避難が必要レベルの地震が来れば、停電

するしガラスが落ちてくる」ことなんて簡単に分かるのに、私たちはそれも想定できていなかったと痛感しました。

——同時に、大川小学校にいた六年生の次女・みずほさんを亡くされました。大川小の対応をどう捉えていますか？

津波が来るまで五十分あったのにも関わらず、校庭から移動を開始したのは津波到達の一分前。狭い通路を一列で進んだのです。しかも、津波はその方向から襲いました。一分間、先生方は必死だったはず。子供たちは泣いたでしょう、転んだかもしれません。そして津波に襲われた瞬間、彼らは子供たちを抱きしめ、そのまま流されていったのだと想像します。こんな無念なことはありません。全国の教師が後悔しています。私はその後悔に向き合っています。同時に、いくら強く抱きしめても一分間では子供を救え

ないという事実にもしつかり向き合わなければと思います。

自分が教師だったから言うわけではありませんが、子供を救いたくない先生はいない。救ってほしかったし、救いたかった命です。それは間違いない。救えた命でも事実としては救えなかった。それを「仕方がなかった」「見ないようしよう」というのは亡くなった先生たちのためにもよくありません。教師は、たまたまそこに居合わせた大人ではありません。「子供たちを預かり、守るという使命を持った大人」です。

——佐藤さんが考える「防災」とは？

宮城県は99%以上の確率で地震・津波が想定され、学校現場でもマニュアルや訓練の見直しが行われてきました。でも、私はその想定の中に娘を入れていませんでした。私たちはどんなすごい災害が想定されても「自分は大丈夫だろう」と思いがちです。南海トラフ地震では三十万人が犠牲になると言われていますが、誰もが三十万人に「自分や家族」は含まれていないと考えています。それをバイアスという簡単な言葉で終わらせてはだめだと思えます。大切なのは防災を他人ごとではなく自分ごとにする事。

——みんなが自分ごとと捉えるのは、な

かなか難しいですね。

防災教育が、恐怖をおおることになっていないでしょうか。だから「自分や大切な人」を想定に入れないのです。その前で考えを止めてしまう。でも、防災は何のためにあるのか？ それは助かるためです。津波はここにも必ず来る、でも避難して、山の上でみんなが「よかつたね」とハイタッチをする——そんなハッピーエンドまで想定しきるのが、本当の防災だと思います。防災で恐怖は希望に変わります。

毎日のあいさつも「防災」になる

——3・11後、教育現場では防災マニュアルづくりや避難訓練がおこなわれていますが、学校や社会は命を救うためにどのような取り組みをすべきですか？



さとう・としろう
1963年宮城県石巻市生まれ。大学卒業後、中学校国語科教師として宮城県内の中学校に勤務。震災後の5月、生徒たちの思いを込めた俳句づくりの授業を行い、各メディアに取り上げられる。2015年救助活動、2013年東日本大震災の意義を考える会を設立、全国で講演活動中。2016年に書籍「16歳の語り部」を監修（ポプラ社刊）。NPO法人カタバディパイザー・ヤラジオバー・ソナリティーとしても活動。

大川小のすぐ側に緩やかな傾斜の山があります。子どもたちが体験学習をしていた誰でも簡単に登れる山です。でも、命を救うのは山ではなく、山に登るという「判断・行動」です。分厚く立派なマニュアルを作り、避難経路をしつらえて教育委員会に提出すれば、それで防災のために上がった気がしがちです。マニュアルや避難訓練が要らないわけではありません。大事なものはそれが「判断・行動」に結びつくものであるかどうかです。大川小に限らず、あの日津波から逃げて助かった人は、「念のため」に行動した人です。見えないし逃げられず、誰も逃げないけれど「念のため」に逃げました。命を災害から守るのは「念のためのギア」です。教員のギアは一般の住民より一段も二段も早く高く入れられるように準備すべきです。教育活動で「命を守る」とは「命を輝かせる」こと。それが実感できれば「この子たちの命を守る」「自分は生き抜くんだ」という気持ちは強まります。「生きていてもつまらない」「死んだ方がましだ」の逆です。

防災とは、大きい声で「ただいまー」と言うことです。あの日、言えなかった、聞けなかった「ただいま」がたくさんあります。「家に帰るまで死ぬな」ということとです。どんなことがあっても帰りつきなくなる家庭をつくることは防災。「おはよう」「おかえりなさい」と言い合える地域づくりも防災。「おはよう」から「おやすみ」の連続も防災です。

食べものも服も寝る場所も、電気も水も、あのとき大切だったものは、今日だって大切なもの。今日もないと困るものです。同じように信頼関係や習慣は、津波が来たときに急につくられるものではないです。命はその最たるもので、災害の時にだけ急に大切になるわけではない。すべてにおいて、「もしもは、いつもの中にある」のです。

——コロナ禍のようにいつ起こるか分からない「災い」から命を守るため、私たちは日々の意識を変えるべきですね。

大川小学校のタイトルは「未来を拓く」です。3・11で起きたことをそれぞれの立場で、私たちは教育の立場でこの経験を未来に生かす必要があります。

私たちは、すでにあれから十年が経った未来に生きています。コロナ禍におけるオンライン授業で混乱している教育現場を見ていると、私たちがあの経験を活かしているのか、目指すべき未来にきているのか——それを問われているようにも思います。